



先生方のマナー

倉橋惣三

粗野に亂れている時代である。よく氣をつけないと、われながら野卑亂暴になる。

マナーなど洋語を借りなくてもいいのだが、行儀というと四角ばり、作法というとよそゆきになり、禮法というと事むづかしそうに聞える。こゝでいうのは、そういう大ぎょうな話ではなくて、日常平生のみだしなみと言語動作のことである。

幼稚園はこうらいべりのお座敷でもなく、風雅な四疊半の茶室でもない。子どもらの元氣と無雜作が活き／＼と賑かに動きまわっている遊び場であり仕事場である。先生方も、シヤナリ／＼しては、その相手も指導もできないのである。躰けつくらに裾もみだれよう、鬼ごつこに髪も散らばろう、喧嘩の中に入つて、およしあそばせではかたがつくまゝい。それを一々柱鏡を氣にしていたり、絹ハンカチーフで口を押さえていたりしては、一時間だつて子供らの中に伍していられるものではない。

こゝでいうのも無論そんなことではないし、若しそんなお

すましの氣どり屋があつたら、後ろから肩をついて、子供達の中へもみくちやにしてやりたい位のものだ。

しかし、だからこそ、初めから服の着方によくしまりを付けておく必要がある。朝から髪をしつかりセットしておかなければなるまい。うっかりしていても、どんなにあわても、あられもない言語が口から飛び出さないように、平生から自分の言葉を馴らしておくことが大切になるのではあるまいか。

幼稚園の先生は御婦人である。婦人に對して、あけすけとこんなことを申すのは、そのことが既にエチケツトに反するかも知れない。しかし、おぢいさんが娘や妹にいう、遠慮のない親切(?)として許して貰えば、目をそむけさせるような、なりふりが目につくことも、耳をふさぎたくなるような口のきゝ方が耳にはいることもないとはいえない。そのなりふりかまわないうところに熱心が貴ばれ、そのぶつかるような言葉に卒直が味はわれなくても、傍から思わすにも居ら振舞つても、物靜かに口をきいても、傍から思わすにも居ら

れない。品位という大げさだが、風格という尙更仰山過ぎるが、そんなことも密に思うのである。それも、あなたのためにだけではない。決して、あなたに對しておせっかいな批評をしているのでもない。それが、子供達におのづから影響してくることを怖れるのである。そうして、子供への感化ということでは、品位、風格ということも言つても、決して大げさでも誇張でもあるまい。それどころか、保育上極く重要なことになるのである。

お行儀をよくしなさいと、子どもに對し、あんまり多く、口でいゝつけることは、今日の新しいしつけではないかも知れない。そんなことよりも、もつと／＼大切な教育のあることは言うまでもない。しかし、いゝマナーの習慣を養うことも、教育の一つの個條である。そうして、それは習慣づけられさえすれば、何も不自然でも非自由でもない。そして、その習慣的養成に最も有効な環境が、先生方のマナーで、そのいゝ影響で、自然に自由にいゝマナーが作られてゆくことは、子供らのために、どんなに幸福なことか、いうまでもない。それよりも先づ、子供らにとつて快いことに相違ないと思うのである。だらけた服や、ちらばつた髪や、ぞんざいな言葉を、子供は決して快いとは思わないし、いゝ先生だけだと困つたものだと思つてもなく氣になつてゐるかも知れない。氣にしているまではまだいゝ。それが平氣になつたとき教育問題になつてくる。

但し、こういつて、先生方におしやれを勧めるのではないこ

とは勿論である。美服美容、おやこは舞臺かしらと驚かさるゝのは、それこそ保育の品位と風格を却つて害うことになる。ふだんの生活に、廣い客席への効果をめあてとしてのステージ風の濃い化粧は寧ろ滑稽であり醜でもある。若しそんな白痴のおつくりを美しいと思つてゐるものがあつたら、その悪趣味を忌みもし、さげすみもする。服装だつて、ヴィジツテングドレスや、パーティー用のハイヒールで、場所のわきまもなくめかし込んで来る人があつたら、『銀座大通り幼稚園』や、『ピカデリーキングダールテン』ではなし、保育の平常心を失わせる危険がある。つまり、いゝマナーというものは、美しいというよりも、きたなくないこと、派手よりも、目だゝないこと、技巧的であるよりも、卒直なこと、自分を見せつけようとするよりも、ぢみに控え目であるのが原則である。従つて、あたりまえに身ぎれいであらばいゝこと、なだらかに整いを失わねばいゝこと、眞卒にして氣ぶりのないことにほかに工夫はない。おしやれとは世にも反對の心がけである。

人格と精神で保育に没頭してゐる先生方に對して、マナーなんか末梢のことかも知れない。末梢でないとしても疾うに備わつてゐることに相違ない。たゞ、折柄に夏が暑い、くたびれる、だるくなる。冷いおしほりでも差上げるといつた氣もちで、失禮な御注意をちよつと申上げる。思えば、こんなことを露骨にいうのは、いゝマナーであるまいが。